

# 音楽聴取時における歌詞の有無と共感性が感情変化に及ぼす影響

小河妙子<sup>1</sup>・篠田侑大<sup>2</sup>

(1: 東海学院大学, 2: 東海学院大学人間関係学部心理学科<sup>註a)</sup>)

## 要 約

我々は日常生活における様々な場面で音楽を聴き、その音楽が楽しみや悲しみなどの感情をもたらす。本研究の目的は、音楽聴取時に共感性の程度が異なる聴取者間において、楽曲の歌詞の有無が感情変化に及ぼす影響について検討することにある。実験では、聴取者に対して、一つの楽曲を歌詞あり条件と歌詞なし条件で提示し、各々の音楽聴取直後に感情価の評定を求めた。その結果、高揚と軽さでは歌詞ありよりも歌詞なしで得点がより高く、逆に親和と強さでは歌詞なしよりも歌詞ありで得点がより高いことが示された。また、共感性の高低は、親和においてのみ効果が認められ、歌詞の有無に関わらず、低群よりも高群で得点が高いことが示された。よって、歌詞の有無は共感性の程度に関わらず感情変化に影響すること、および共感性の高さは歌詞の有無に関わらず、親和的感情にのみ影響することが示唆された。

キーワード: 共感性, 音楽, 感情価, 歌詞

(2016. 9. 23 受稿 査読審査を経て 2016. 10. 21 受理)

私たちは日常生活において、様々な場面で音楽を耳にする。テレビやラジオの番組を通して、あるいは買い物中の店内やレストランでのBGMとして、また移動中のバスや電車の中で音楽プレーヤーを用いて聴取するなど、音楽は、古くから多くの人々に親しまれている。なぜ人々は音楽を聴くのだろうか。その一つの要因として、音楽が人々の心を動かす力をもつことが挙げられる。

近年、音楽心理学の領域における研究が盛んであり、とくに音楽聴取と感情に関する多くの研究が報告されてきた (e.g., 楠瀬・井上, 2009; 松本, 2002; 森, 2010; 森・岩永, 2014; 大村・柴山・寺澤・星・川上・吹野・岡ノ谷・古川, 2013; Sachs, Damasio, & Habibi, 2015; 谷口, 2006; 安田・中村, 2008)。例えば、人は悲しい気分の時には悲しい音楽を聴くことが多いことが知られている。

音楽の気分誘導効果に関する研究において、松本(2002)は、悲しい気分の時に、悲しい音楽あるいは明るい音楽を聴くと、気分がどのように変化するかを、大学生を対象とした調査によって検討している。その結果、悲しみが弱いときと強いときとで、異なる結果が得られた。悲しみが弱いときに悲しい音楽を聴くと、悲しい気

分の強さは変化しないのに対して、悲しみが強いときには、悲しい音楽の聴取によって悲しい気分が緩和されるという結果が報告された。また、明るい音楽を聴いた場合、聴取前後で悲しい気分の変化は認められなかった。つまり、悲しい音楽の聴取は、悲しみが弱いときには効果がないが、悲しみが強いときには悲しみを緩和する効果があるといえる。

このように、人々は日常生活の中で、悲しい感情をコントロールするために悲しい音楽を聴き利用しているともいえる。音楽が感情を引き起こす原因は、音に関する要因だけでなく、それ以外の要因も含まれる (森, 2010; 大村他, 2013)。例えば、音に関する要因では、音程変化やリズム、音楽の形式、調性、音色などが挙げられる。さらには、音以外では、好みのジャンルや作曲家や演奏家、聴取環境などもある。その中でも、日常聴取される多くの音楽に含まれている歌詞が果たす役割に関する研究が、森(2010)によって報告されている。

森(2010)は、日常の音楽聴取において歌詞の存在は欠かせない重要な要素であると論じている。森(2010)は学生および社会人を対象として質問紙調査を実施し、歌詞に関する音楽聴取傾向と歌詞のもたらす感情反応に

ついて検討を加えている。その結果、歌詞ありの楽曲と歌詞なしの楽曲（楽器のみで演奏）の平均聴取比率は、80.8 対 19.2 であり、また日本語歌詞と外国語歌詞の比率は、71.2 対 28.8 であったと報告している。つまり、日本人が聴取する音楽は、多くの場合、歌詞のある音楽であり、その歌詞が日本語であることが報告された。

さらに、感情反応については、例えば音楽を聴いて悲しくなるなど、音楽に感情を認める反応を“印象”，これに対して音楽によって感情が引き起こされる反応を“情動”として、感情反応 2 水準（印象／情動）と、関連要因として 4 水準（演奏音／気分／記憶／歌詞）の 2 要因からなる分析を行っている。感情反応では、音楽に情動を認知する頻度（印象）と音楽に情動を喚起される頻度（情動）が 4 件法で求められた（1: 感じない～4: 常に感じる）。また、関連要因では、感情反応において、“2: たまに感じる”以上の反応を示した参加者に対して、印象と情動の各々に対して“演奏音”，“聴取時の気分（気分）”，“記憶や経験（記憶）”，“歌詞”がどの程度関連するか、4 件法で回答を求められた（1: 関連しない～4: 非常に関連する）。その結果、感情反応では、情動の評定値が、気分と記憶に関してのみ、印象の評定値よりも高いことが確認された。つまり、気分と記憶は、印象よりも情動を喚起するのに強く影響するが、歌詞は印象にも情動にも同じく影響を及ぼすと考えられた。また、関連要因では、情動のみで、気分・記憶・歌詞の評定値が演奏音の評定値よりも高いことが明らかになり、歌詞は情動喚起のみに演奏音よりも強く関連し、気分や記憶と同等の影響を及ぼすと考えられた。よって、歌詞は印象よりも情動に対して相対的に強く影響を及ぼすことが示唆された。

また、森（2010）は、印象と情動のそれぞれの評定値に対して、演奏音、気分、記憶、歌詞を説明変数とした重回帰分析を実施している。その結果、印象では演奏音と記憶が有意な説明変数であり、情動では、演奏音・気分・記憶が有意な説明変数であることが確認された。これに対して、歌詞は、印象評定値および情動評定値のどちらにも影響しなかった。よって、歌詞は音楽が感情反応をもたらす頻度には寄与しにくいことが示唆された。

しかしながら、森（2010）では、参加者が想起する歌詞は統制されていない。参加者には、調査において、これまで聴取した楽曲の中で印象に残っている 1 フレーズを想起させているが、各参加者は異なる楽曲の歌詞を想起していると考えられる。そのため、各参加者が想起した歌詞の内容によって、様々な異なる感情反応が生起し

ていたかもしれず、歌詞が印象評定値にも情動評定値にも影響しないという結果になった可能性も否定できない。

また、森（2010）では、音楽聴取傾向と音楽ジャンルの嗜好性の関連性も検討されている。クラシックを好んで聴取する人は歌詞を重視しないのに対して、ポップやラップ・ヒップホップを好んで聴取する人は歌詞を重要視すると報告されている。しかし、クラシックを好んで聴取する人も、ポップを聴取するときには、ポップを好む群と同じように、歌詞を重視している可能性もある。

そこで本研究では、大学生および大学院生を対象に、日本語歌詞を含むポップ 1 曲を刺激材料として、歌詞の有無による感情変化について検討を加えることを目的とする。森（2010）の研究では、印象よりも情動に対して歌詞が相対的に強く影響を及ぼすことが示唆されている。そこで本研究では、音楽によって引き起こされる感情、つまり森（2010）の定義する“情動”を対象とする。その際、聴取者の共感性能力が感情反応に影響するか否かについても検討を加える。

共感とは、他者の思考や感情を含む内的状態を知り理解すること、そして他者の立場を想像し、その他者の苦痛に対して思いやりや気遣いを伴った反応をすることである（Decety & Ickes, 2009; Preston & de Waal, 2002）。向社会的行動を動機づける心理的構成概念である共感は、基本的な感情伝染システム（感情的要素）と認知的視点取得システム（認知的要素）の両者によって調節される。特に視点取得は、他者の視点を想像することによって、その他者の思考や感情を理解しようとする機能であり、対人認知や感情などの多くの側面から検討されてきた。音楽認知においても、音楽聴取時に聴取者自身が歌詞の主人公の立場に立って曲を理解しようとする程度や主人公の感情に共感できる程度は、特に歌詞を伴う音楽聴取における感情変化に影響すると考えられる。

例えば、西浦ら（西浦・大森・水田, 2015; 西浦・大森・森本・水田, 2014）は、共感の指向性と音楽聴取傾向および感情変化に着目した研究を報告している。他者の苦痛に対して暖かい気持ちをもつ他者指向的共感と、自身が苦痛を感じる自己指向的共感の 2 タイプに着目し、J ポップの悲しい曲を材料として、共感の指向性が悲しみの感情を和らげる効果について検討している。その結果、他者指向的な群では、皮膚電位反応の振幅の増減がみられ、歌詞の主人公の気持ちを予測する傾向が示唆されたのに対して、自己指向的な群では、自己の苦痛を回避するために共感を抑制することで悲しみをコントロールし

ていたと報告された。ただし、西浦らの研究においても、6曲の中から1曲を参加者に選択させ、曲の聴取前後に気分評定を行っているために、各参加者は異なる楽曲の歌詞を聞いていたことになる。また、研究の結果、他者指向的な群では、気分の維持や改善の手段として音楽を聴取することが多いことも報告されている。

本研究では、仮説として、共感性が高い人は他者が感じているもしくは予期される感情に反応しやすいと考えられるため、歌詞入りの曲を聴いて大きな感情価の変化を示す。一方で、共感性が低い人は他者が感じているもしくは予期される感情に反応しにくいと考えられるため、歌詞ありあるいは歌詞なしの曲を聴いても感情価の変化は小さいと考えられる。

## 方法

**実験参加者** 大学生および大学院生 80名 ( $M = 21.26$  歳, 標準偏差 [ $SD$ ] = 0.88) を対象とした。内訳は男性 34名, 女性 46名であった。実験に先立ち、口頭で今回の実験の趣旨を参加者に説明した。参加が任意であることや途中で棄権しても不利益のないことなどを十分に説明し、同意が得られた後に実験を実施した。

**実験計画** 歌詞の有無(有/無), および共感性(高群/低群)の2要因からなる混合計画であった。歌詞の有無は参加者内要因であり、共感性の高低は参加者間要因であった。従属変数は、音楽の感情価測定尺度得点(谷口, 1995)とした。

**使用した質問紙** 本研究では二種類の質問紙を用いた。多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008)は、5つの下位因子から構成された。被影響性(5項目), 他者指向的反応(5項目), 想像性(5項目), 視点取得(5項目), 自己指向的反応(4項目)の合計24項目を使用した。

例えば、被影響性因子には“自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい”などの項目が含まれる。また、他者指向的反応因子には“悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる”, 想像性因子には、“空想することが好きだ”, 視点取得因子には“常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている”, そして自己指向的反応因子には“他人の成功を素直に喜べないことがある”などが含まれた。回答は5件法で求めた(1: 全くあてはまらない ~ 5: とてもよくあてはまる)。第1因子と第2因子の各2項目, 第3因子と第4因子の各1項目の計6項目は逆転項目であり、評定値が高いほど当該の特性が強いことを示すように得点化を行った。

感情価測定尺度(谷口, 1995)は、5つの下位因子から構成されるが、そのうち“荘重”因子は、本研究で用いた楽曲がポップであるため関連性が薄いと判断し、除外した。よって残りの4因子を用いた。高揚(8項目; 例, “楽しい”), 軽さ(4項目; 例, “気まぐれな”), 強さ(4項目; 例, “猛烈な”), 親和(4項目; 例, “おだやかな”)の合計20項目を使用した。これらの質問項目も5件法にて評定を求めた(1: 全くあてはまらない ~ 5: よくあてはまる)。なお、高揚因子の項目数のみが他の因子に比べて2倍であるために、谷口(1995)では、抑うつ傾向の4項目を逆転項目として処理し、高揚傾向の4項目の得点と合計し、他の尺度と得点範囲を同じにするためにこれを2分の1にしたものを尺度得点としたとされる。本研究でも、同様の方法で算出した。

またその他の質問として、(1) 歌詞のどこに共感したかを調査用紙に印刷された歌詞に丸印をつけて回答すること、(2) なぜその部分に共感したか自由記述すること、という2問を追加調査<sup>註b)</sup>として行った。以上の質問項目をA4サイズの用紙に印刷して冊子として使用した。

**手続き** 実験および質問紙は、実験室で個別に実施した。楽曲はLe Coupleによる“ひだまりの詩”から2コーラスを用いた。歌詞なし条件では、カラオケバージョンを使用した。実験では、参加者に楽曲を聴かせる前に、多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008)への回答を求めて共感性を測定した。その後、半数の参加者に対しては歌詞あり条件を先に実施し、歌詞の入った楽曲を聴取させた後、音楽作品の感情価測定尺度(谷口, 1995)への回答を求めた。参加者に対して、音楽を聴いてどのような気分になったか、どのような感情が生じたか評定するように教示した。次に歌詞なしの楽曲を聴取させ、直後にもう一度、音楽作品の感情価測定尺度を行った。カウンターバランスのため、残り半数の参加者には、歌詞なしの楽曲から歌詞ありの楽曲を聴取する順で実施した。

楽曲は、デスクトップ・パソコン(DELL製, vostro220)に接続したスピーカー(SOTEC製)を用いて再生した。再生したソフトウェアはWindows Media Playerであった。

実験終了後に自作アンケート部分として、この楽曲について聴いたことがあるか(はい・いいえの2件法)、この楽曲は好きか(5件法)、音楽は好きか(5件法)、この楽曲に共感したか(5件法)、この楽曲についてどう思ったか(自由記述)を質問した。また、参加者47人目から前述の2項目<sup>註b)</sup>を追加した。

## 結果

表1および表2は、参加者80名の多次元共感性尺度および感情価尺度における各下位因子の平均得点とSDを示す。参加者を共感性の高さによって二群に分けるために、共感性得点の合計得点を算出して、中央値86点を境にして、86点以上を高群(40名、範囲:86点以上104点以下、平均:92.2点)、85以下(40名、範囲:58点以上85点以下、平均:78.0点)を低群とした。

表1. 多次元共感性尺度における各下位因子の平均得点 ( $n = 80$ )

	平均		SD
	平均	SD	
被影響性	2.95	0.82	
他者指向的反応	3.86	0.62	
想像性	3.62	0.76	
視点取得	3.67	0.65	
自己指向的反応	3.65	0.65	

表2. 感情価尺度における歌詞あり条件と歌詞なし条件の各下位因子の平均得点 ( $n = 80$ )

	歌詞あり		歌詞なし	
	平均	SD	平均	SD
高揚	9.88	2.65	14.79	2.84
軽さ	6.53	2.68	8.49	3.06
親和	15.70	2.44	14.66	2.93
強さ	6.46	2.65	5.84	2.79

## (1) 共感性高低群における感情価の相違に関する分析

表3は、感情価尺度の4因子について、歌詞の有無および共感性による高低群の各平均値とSDを示す。

表3. 条件ごとの各因子における平均評定値およびSD

		歌詞あり		歌詞なし	
		平均	SD	平均	SD
高揚	高群	10.09	2.98	14.60	3.46
	低群	9.66	2.26	14.99	2.03
軽さ	高群	6.43	2.73	8.78	3.63
	低群	6.63	2.62	8.20	2.33
親和	高群	16.65	2.12	15.35	3.09
	低群	14.75	2.36	13.98	2.58
強さ	高群	6.85	3.02	6.35	3.45
	低群	6.08	2.16	5.33	1.78

これらの感情価に対して、各因子ごとに歌詞の有無(2水準:歌詞あり/歌詞なし)と共感性(2水準:高群/低群)の2要因からなる分散分析を行った。

その結果、高揚得点で歌詞の有無による主効果が有意であり( $F(1,78) = 107.53, p < .001$ )、歌詞なし条件の得点が歌詞あり条件のそれよりも高いことが明らかとなった。

た。しかし、共感性の主効果は有意ではなく( $F(1,78) = 0.73, n.s.$ )、歌詞の有無要因と共感性要因との交互作用も有意ではなかった( $F(1,78) = .002, n.s.$ )。

高揚因子と同様に、軽さ因子に関しても、歌詞の有無の主効果が有意であり( $F(1,78) = 33.32, p < .001$ )、歌詞なし条件の得点が歌詞あり条件のそれよりも高いことが明らかとなった。しかし、共感性の主効果は有意ではなく( $F(1,78) = .12, n.s.$ )、同様に両要因間の交互作用も有意ではなかった( $F(1,78) = 1.3, n.s.$ )。

一方、親和因子でも歌詞の有無による主効果が有意であったが( $F(1,78) = 9.6, p < .05$ )、逆の方向の有意差が認められた。つまり、歌詞あり条件において歌詞なし条件よりも得点が高かった。また、親和得点では、共感性の主効果も有意であった( $F(1,78) = 11.9, p < .001$ )。共感性が低い群よりも高い群において、親和得点が高かった。一方で、両要因間の交互作用は有意ではなかった( $F(1,78) = .62, n.s.$ )。

強さ因子においても親和因子と同様に、歌詞の有無による主効果が有意であり( $F(1,78) = 5.62, p < .05$ )、歌詞あり条件のほうが歌詞なし条件よりも得点が高かった。しかし、共感性の主効果は有意ではなく( $F(1,78) = 2.7, n.s.$ )、また両要因間の交互作用も有意ではなかった( $F(1,78) = .23, n.s.$ )。

以上の結果から、歌詞の有無については、高揚因子と軽さ因子では、歌詞なし条件のほうが歌詞あり条件よりも得点が高いのに対して、親和因子と強さ因子では、歌詞あり条件のほうが歌詞なし条件よりも得点が高いことが明らかとなった。また、共感性の高低群による差では、共感性が低い群よりも高い群において、親和因子の得点のみが有意に高いことが示された。

## (2) 共感性5因子を説明変数とした重回帰分析

上記の分析(1)では、共感性要因について、共感性得点の合計得点に基づく高低群を比較した。しかし、共感性5因子の合計得点を用いた群分けによる分析では、各下位因子が表す共感性の異なる側面を捉えることは不十分である。そこで次に、共感性のいずれの下位因子がどの程度感情価に影響を及ぼすのかを検討するために、感情価4因子について、歌詞あり条件と歌詞なし条件の別に、共感性の5因子(被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得、自己指向的反応)を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。

その結果、親和因子および軽さ因子において、共感性の下位因子が影響を及ぼすことが明らかとなった。図1

は、歌詞あり条件および歌詞なし条件における重回帰分析による結果のパス図を示す。

親和を従属変数とする分析の結果、歌詞あり条件と歌詞なし条件の両方で、想像性因子のみが有意な説明変数であることがわかった。歌詞あり条件における決定係数 ( $R^2$ ) は .18 であり ( $F(1, 78) = 16.99, p < .001$ )、歌詞なし条件における決定係数は .08 であった ( $F(1, 78) = 6.74, p < .05$ )。つまり、歌詞の有無条件に関わらず、聴取者の想像性が高いほど親和も高まることが示された。

また軽さを従属変数とする分析の結果、歌詞あり条件では、他者指向的反応のみ、軽さ得点に対する負の影響が確認された ( $R^2 = .05; F(1, 78) = 4.14, p < .05$ )。一方、歌詞なし条件では、いずれの説明変数も有意ではなかった。つまり、歌詞がある楽曲を聴取する場合には、聴取者の他者指向的反応が高いほど、軽さ得点が低下することが示された。

高揚および強さを従属変数とする分析については、歌詞あり条件および歌詞なし条件のいずれにおいても、有意な説明変数は認められなかった。

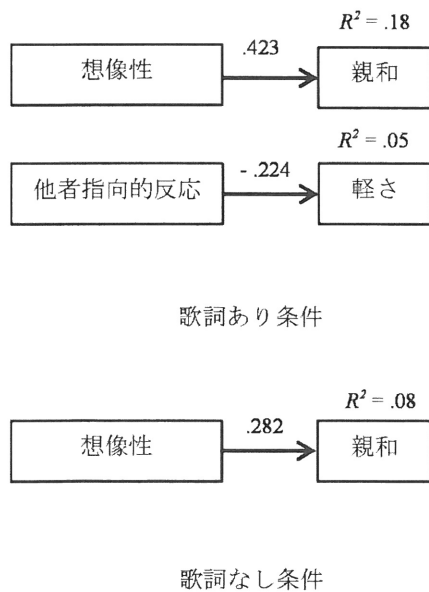


図1 共感性が感情価に及ぼす影響 (矢印の上の数字は標準化β係数を表す)

### (3) その他の質問項目に関する分析

この楽曲を聴いたことがあるかどうかについて参加者に尋ねたところ、歌詞ありの場合“はい”が41人、“いいえ”が39人であった。ほぼ半数が聴いたことがあると答えた。歌詞なしの場合“はい”が27人、“いいえ”が53人

であった。半数以上は聴いたことがないと答えた。

次にこの楽曲が好きかどうかを尋ねたところ、歌詞ありの場合では平均3.9点 ( $SD = 0.9$ )、歌詞なしの場合では平均4.0点 ( $SD = 0.8$ )であった。若干ではあるが、歌詞なしの場合の方が得点は高い。しかし統計的に有意な差ではなかった ( $t(156) = 1.17, n.s.$ )。音楽は好きかどうかを尋ねたところ平均4.7点 ( $SD = 0.7$ )であった。参加者のほとんどが音楽自体好きであることが示された。この曲に共感できるかどうかについて尋ねたところ、歌詞ありの場合で平均3.1点 ( $SD = 1.0$ )であった。また、歌詞なしの場合も平均3.0点 ( $SD = 1.1$ )であり、どちらの場合も“どちらでもない”という結果になった。

この楽曲についてどう思ったか自由記述にて回答を求めた結果を表4にまとめた(複数回答あり)。自由記述から実験者1名が“リズム”や“切ない”などのキーワードに着目し、出現数の多かった上位4つをカテゴリーとして全記述を振り分けた。4カテゴリーに入らない記述は、その他とした。その後、もう1名の実験者が各カテゴリーに振り分けられた結果を確認した<sup>註c)</sup>。

表4より、歌詞あり条件では、“悲しい”や“切ない”と言ったネガティブな回答が多かった。その次に“おだやか”や“落ち着く”といった回答が多かった。“リズム”や“テンポ”といったこと回答もいくつかあげられていた。また、歌詞の有無についてもあげられていた。

歌詞なし条件では、“落ち着く”、“リラックス”という回答が多くあげられていた。次に“明るい”、“元気が出る”といったポジティブな回答が多くあげられていた。次に“リズム”、“テンポ”といった回答もいくつかあげられていた。

表5は、追加の調査において回答を求めた歌詞のどこに共感したかに関する結果を示す(複数回答あり)。

表5より、“すべて忘れないで”というところが15人と多く、次に“あなた残してくれた”12人、“それぞれ別々の人”9人、“好きになっても”9人、“誰かを愛せるよに”8人と続いた。ここまでは2コーラス目のサビの部分であり、この2コーラス目のサビに共感する参加者が多かった。

次に、“まるでひだまりでした”7人、“どんなに言葉にしても足りないくらい”6人、“あなた愛してくれた”5人、“すべて包んでくれた”5人となり、ここまでの1コーラス目のサビの部分であり、1コーラス目のサビの部分に共感する参加者も多かった。理由としては自分自身が経験したことや、今の状態がそうである、など自分自身の

## 音楽聴取時における歌詞の有無と共感性が感情変化に及ぼす影響

経験と重ねて共感したという参加者が多かった。また、作詞者の気持ちを考え、“こんな風にできたらな”や“このように思いたい”という回答した参加者も多かった。

表4. 楽曲についての自由記述

		人数
歌詞あり	1 悲しい, 切ない	40
	2 おだやか, 落ち着く	19
	3 リズム・テンポについて	5
	4 歌詞の有無について	4
	5 その他	20
歌詞なし	1 落ちつく, リラックス	45
	2 明るい, 元気が出る	14
	3 リズム・テンポについて	10
	4 切ない, 暗い	7
	5 その他	10

表5. 選択された歌詞

歌詞	人数
すべて忘れないで	15
あなた残してくれた	12
それぞれ別々の人	9
好きになっても	9
誰かを愛せるよに	8
まるでひだまりでした	7
どんなに言葉にしても足りないくらい	6
あなた愛してくれた	5
すべて包んでくれた	5
その他	20

### 考察

本研究の目的は、音楽聴取時に聴取者の共感性の程度によって、楽曲の歌詞の有無が感情変化に及ぼす影響が異なるかを明らかにすることであった。実験の結果、次の三点が確認された。

第一に、聴取者の共感性の程度に関わらず、歌詞の有無が音楽聴取後の感情価4因子に影響を及ぼすことが明らかとなった。“親和”と“強さ”因子については、歌詞なし条件よりも歌詞あり条件のほうが、感情価がより高いことが示された。これとは逆に、“高揚”と“軽さ”では、歌詞あり条件よりも歌詞なし条件のほうが、感情価が高いことが示された。

第二に、歌詞の有無に関わらず、共感性の高さは、“親和”においてのみ差異をもたらすことがわかった。つまり、親和得点は、共感性が低い群よりも高い群において得点が高いことが示された。ただし、聴取者の共感性の程度と歌詞の有無との交互作用は、いずれの感情価においても確認されなかった。

最後に、重回帰分析の結果、共感性を構成する要素の中でも、想像性が“親和”に正の影響を及ぼし、他者指向的反応が歌詞ありの場合のみ“軽さ”に負の影響を及ぼすことが確認された。

実験の結果、“親和”感情については、高群のほうが低群よりも感情価が高いという違いが観察された。この結果は、共感性が高い人ほど、楽曲を聴く時に穏やかさや優しさなどの親和的感情が影響を受け変化することを示唆する。ただし、歌詞の有無との交互作用は認められず、歌詞を含む曲か否かは関係しないようであった。

また、感情価測定尺度から得られた結果は、共感性の程度に関わらず、歌詞の有無が影響を与えていることが示された。“高揚”では、歌詞あり条件よりも歌詞なし条件で得点が高かった。このことは、歌詞ありの楽曲では、この曲の歌詞が失恋を表した内容であるため暗く、悲しい印象を与えるため、歌詞あり条件が歌詞なし条件の得点より低い。一方で、歌詞なし条件は歌詞から連想される暗さがなく、曲調も長調のため明るく陽気な楽曲に感じられたのではないかと考えられる。また、同様に“軽さ”でも、歌詞の有無による主効果が認められた。この結果も、歌詞なし条件では歌詞がないため重苦しく感じさせず、聴取者に軽快な感じを与えたと推測できる。これもこの曲が失恋の楽曲であるため、歌詞がある条件のほうが、重く感じられたのではないかと考えられる。

一方で、“親和”と“強さ”については、歌詞の有無による比較において、歌詞あり条件で歌詞なし条件よりも得点が高いことが示された。このことは、“親和”については、聴取者は歌詞が表現する優しさやいとしさ、恋しさ、穏やかな感じを受けたと考えられる。今回の曲は女性アーティストの曲であり、雰囲気として優しい声の感じを受けると考えられ、そのため、歌詞あり条件のほうが得点は高い値を示したと推測される。“強さ”についても、歌詞があるほうが強さや刺激的、強烈さを感じたと考えられる。楽曲に声が入ることで、人の声という音がプラスされる。この歌声のために、歌詞あり条件で得点が高いことが示されたのではないかと考えられる。以上のことから、楽曲の歌詞が聴き手に与える影響は大きいと示唆される。

また、重回帰分析の結果、想像性が高い聴取者ほど親和感情が高まること、および他者指向的反応が高い聴取者ほど、楽曲を重く感じることを示された。この結果は、共感能力の中でも、とくに聴取者本人の想像性が高いこと、および他者の感情に共感し何かしらの働きかけや反

応をしやすい特性を持つ人ほど、楽曲から感情反応に影響を受けることを示唆し、西浦ら (2014) が報告した他者指向的な群における結果とも共通する点である。このことは、歌詞の有無に関係なく、音楽を聴くことによって生じる影響であるといえる。よって、共感性の高さが音楽聴取時の感情変化に重要な役割を果たすことが示唆された。ただし、今回の研究では、用いた刺激材料が失恋をテーマにした1曲のみであり、また楽曲の調性や歌手の性別などが限定されていたという限界がある。そのため、今回の結果が失恋に関連した歌詞以外の楽曲や、男性歌手による歌唱である場合などにも一般化できるか否かは、さらなる検証が必要であると考えられる。

今後の課題として、テーマの異なる歌詞を含む複数の楽曲を用いることや、楽曲の調性、歌手の性別などを考慮した実験を行うことが挙げられる。楽曲に対する嗜好性や個人の共感性には個人差がある。曲を増やすことにより、楽曲に対する嗜好性や個人の共感性の個人差を補うことができるのではないかと考えられる。

## 謝辞

実験に参加して下さった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。また英文要約作成に本学の富田理恵先生より貴重なご助言を頂きました。また2名の査読者から多くの貴重なご意見を頂きました。厚く御礼申し上げます。

## 脚注

- a. 本論文は、第二著者が提出した東海学院大学人間関係学部心理学科卒業論文 (2015 年度) をもとに加筆修正したものである。
- b. ただし、この2つの追加質問は、全参加者のうち34名からのみ得られたものであった。
- c. カテゴリー分けについては、2名以上の実験者による一致率を算出して詳細に検討すべきであるが、今回は質問紙による評定値が主な分析対象であり、自由記述は補足的データとして位置づけるため、実験者1名がキーワードを基準として選定し、もう1名が確認するにとどめた。

## 引用文献

Decety, J., & Ickes, W. (2009). *The Social Neuroscience of Empathy*. Cambridge: MIT Press.

- 楠瀬 理恵・井上 健 (2009). 音楽作品の調性が感情に及ぼす影響について—精神生理学的検討—臨床教育心理学研究, 35, 1-7.
- 松本 じゅんこ (2002). 快適な気分における悲しい音楽の影響—音楽知覚認知研究, 9, 13-19.
- 森 数馬 (2010). 日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究—対人社会心理学研究, 10, 131-137.
- 森 数馬・岩永 誠 (2014). 音楽による強烈な情動として生じる鳥肌感の研究動向と展望—心理学研究, 85, 495-509.
- 西浦真結・大森慈子・水田敏郎 (2014). 大学生における共感の指向性と音楽聴取傾向との関連—気分調節の手段の検討—日本心理学会第78回大会発表論文集, 948.
- 西浦真結・大森慈子・森本文人・水田敏郎 (2015). 共感の指向性が悲しみの緩和に与える影響—悲しい曲を聴取した際の生理的・心理的变化—日本心理学会第79回大会発表論文集, 894.
- 大村 英史・柴山 拓郎・寺澤 洋子・星 (柴) 玲子・川上 愛・吹野 美和・岡ノ谷 一夫・古川 聖 (2013). 音楽情動研究の動向—日本音響学会誌, 69, 467-478.
- Preston, S. D., & de Waal, F. B. M. (2002). Empathy: Its ultimate and proximate bases. *Behavioral and Brain Sciences*, 25, 1-72.
- Sachs, M. E., Damasio, A., & Habibi, A. (2015). The pleasures of sad music: a systematic review. *Frontiers in Human Neuroscience*, Jul 24; 9:404. doi: 0.3389/fnhum.2015.00404.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—教育心理学研究, 56, 487-497.
- 谷口 高士 (1995). 音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情尺度との関連の検討—心理学研究, 65, 463-470.
- 谷口 高士 (2006). 音楽を聴くということの心理的意味を考察—心理学からのアプローチ—日本音響学会誌, 62, 682-687.
- 安田 晶子・中村 敏枝 (2008). 音楽聴取による感動の心理学的研究—身体反応の主観的計測に基づいて—認知心理学研究, 6, 11-19.

# Effects of lyrics and empathy on emotional changes when listening to music

Taeko Ogawa and Yuudai Shinoda

## Abstract

People listen to music in their daily life under different conditions, and music gives us different emotional experiences, including happiness and sadness. The influence of lyrics on emotional changes in listeners having different empathic abilities were investigated. Participants listened to music under lyric, or non-lyric conditions and rated the affective value of the music immediately after listening. Results indicated that 'enhancement' and 'lightness' factor scores were higher in the non-lyric than in the lyric condition, whereas 'affinity' and 'strength' factor scores were higher in the lyric than in the non-lyric condition. Moreover, only the affinity factor score was higher in the high empathy group compared to the low empathy group. These results suggest that lyrics affect emotional changes, regardless of the degree of empathy and that empathic ability affects affinity regardless of the presence or absence of lyrics.

Keywords: empathy, music, affective value, lyric